

Title	ホガースの天使たち
Author(s)	仙葉,豊
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 81-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77077
rights	
Note	

## The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## ホガースの天使たち

## 仙葉 豊

この小論では、ウィリアム・ホガース(William Hogarth)の晩年の風刺画「軽信、迷信、 狂信一ある混成図」(Credulity, Superstition, Fanaticism. A Medley 1762 以下 CSFと略 記)と『美の分析』(*The Analysis of Beauty* 1753 以下 *AB* と略記)の「説明図 Plate I 」 に付けられた天使の像を論ずることで、ホガースの宗教および絵画風刺の一端を考えてみ たい。CFSは、その二・三年前に創作されていたと推定されている「熱狂の図」(Enthusiasm Delineated 以下 ED と略記)を、その構図をそのまま生かし、細部をかなり変更して出版 したものであった。ED はその内容の刺激が強すぎて、本来の風刺ターゲットとして意図さ れていたメソジストとカトリックへの攻撃が、誤ってキリスト教そのものへの攻撃だとと られかねない危険があるから、出版を思いとどまるようという親友のジョン・ホードリー (John Hoadly) の忠告を入れて、彼は、これをゲラの段階で抑えて発表しなかったのだ。 (Ulglow 651) ホードリーは、ホガースの激しすぎる風刺画が逆火となってホガース自身 に戻ってくる危険性を指摘したのだった。この残されたゲラには、ホガース自身が書き加え たというメモが残っており、そこには、"The Intention of this print is to give a Lineal representation of the strange Effects of literal and low conceptions of Sacred Beings as also of the Idolatrous Tendency of Pictures in churches and prints in Religious books" (Hogarth's Graphic Works, 以下 GW と略記 175) とある。ここに見られるように、彼の意図は、明ら かに「霊的な存在の低俗な概念」とカトリックの絵画や版画における「偶像崇拝的な傾向」 を揶揄したものであり、この作品には、宗教と絵画にわたる二つの風刺的な要素があったこ とがわかる。メモの別の箇所には、ラファエロやルーベンスから採った模倣図像もこの中に 含まれると言及しているので、ホガースが、ここに描かれたフランスやイタリアの聖画像中 にみえる天使像を、偶像崇拝の揶揄として意図していたことはほぼ間違いないであろう。メ ソジストの説教風景は当時の現実的なものだし、仏伊の伝統的な宗教画に見られる天使の 図像は、絵画的な偶像表象なのであるから、このような風俗風刺画にあっては、聖俗相いれ ない、不釣り合いなものと見える。

EDやそれを踏襲した CSFでは、18世紀中ごろに、ジョン・ウェズリー(John Wesley)やジョージ・ホイットフィールド(George Whitefield)などの指導のもとに、急速に発展していたメソジストの新しい覚醒運動への風刺が、基本のテーマになっている。1756 年には、ホイットフィールドは、メソジストの教会堂(Tabernacle)をロンドンのトッテナム・コート・ロードに開いており、これらの風刺画は、この教会堂の内部が描かれているとされてい

るのだ。また、CSFが出版された 1762 年の前半には、よく知られたイギリス 18 世紀最大の幽霊事件として、コック・レイン(Cock Lane)の幽霊をめぐる裁判がロンドン中の話題となっていたので、その幽霊談の捏造者であるウィリアム・パーソンズ(William Parsons)がメソジストだったこともあり、これを絶好の機会ととらえたホガースは、この事件を前面に出しての描き換えを行って、いったんは挫折した ED を新しく CSF として世に出すことに成功したのであった(仙葉「英国 18 世紀幽霊実話の構造」)。

これから扱うことになるホガースの天使たちは、風刺の対象ということもあって、かなり 異様なバーレスク風のものなのだが、ホガースはそれ以外にも普通の天使の図像を多数描 いていることはある。ペインティングではあるが、「ベテスダの池」( The Pool of Bethesda 1735) では、病人を癒すという聖書中の池の上で、天使が宙に舞っているし、時流の風刺画 「仮面舞踏会チケット」(Masquerade Ticket 1727)では、淫靡な仮面舞踏会の会場のホー ル脇に、ヴィーナスとともに矢を射かける目隠しされたキューピッドが描かれている。ミル トンを愛したホガースは、ABの表紙の蛇状曲線の説明に、『失楽園』から採った、蛇になっ たセイタンの描写からの引用を掲げているし、初期の発表されなかった習作の『失楽園』の 挿絵(The Council in Hell 1725)では、万魔殿に集結する堕天使たちを独特のパースペク ティヴで描いている。ホガースを一躍有名にした銅版画連作「娼婦一代記」(A Harlot's Progress 1732) の予約チケット「自然の女神を盗み見る少年たち」(Boys Peeping at Nature 1731) では、自然神である豊穣の女神のスカートを小サテュロスが持ち上げて覗き見よう としているのを、プットー(裸童)が止めている図案になっている。また、「フェリックス の前に立つパウロ | (Paul before Felix 1751) というバーレスク気味の聖書画では、判事フ ェリックスの前で弁明するパウロが描かれているのだが、その足元には小太りした守護神 がその役割を忘れて眠りこけているし、小悪魔が足元の台の足をのこぎりで切り落として その弁明の失敗を図っている。このように見てくるとホガースは、ごくごく一般的な絵画上 の概念としてのさまざまな天使像、堕天使や守護神、そしてキューピッドやプットーなどを 含めたその多様な姿を十分認知したうえで、それを意識的に異様な形に定着していること に気づくだろう。フランス・イタリア嫌いで愛国的であったホガースではあったが、義父で あり師でもあるソーンヒルの膨大な大陸絵画のコレクションに親しみ、その影響を受けて もいたのである。(アンタル 145)

まず、CSFの右手天井近くに現れる天使を見てみよう(図 1)。雲の中に現れているのが野球帽のようなもの(聖像の光背を皮肉っている)を被った幼児のような顔が二枚の羽根に乗って、口には、"To St Money Trap"と書かれたカードを咥えている。この部分はEDにはなかったもので、CSFになって描き加えられたものである。ロナルド・ポールソン(Ronald Paulson)によると、これは、"A Cherub in a Postboy Cap" (GW 178)ということなので、これは「郵便配達夫の帽子を被った童子天使」ということになる。ここでは天使の位階はあまり問題にならず、智天使というよりは、単に幼児の顔だけで体(body)のない、つまり実体のない天使が不格好な形の羽根をつけて出現しているのだろう。これを直近に見た説教

師は驚いて、つけていた鬘を後ろに飛ばしている。彼は右手に箒に乗った黒猫の使い魔に自 らの乳房を与えている魔女と、左手に焼き網を手にした悪魔の操り人形、を持っているが、 これらは、自分のしている説教の主題を物語っているのだろう。迷信的な信仰と地獄での業 火の懲罰をちょうど説いていたところに、郵便配達夫としてメッセージを天使が届けに出 現し、これに驚いているというわけだ。18世紀の初頭にはすでにロンドン市内ではペニー・ ポストとして 1 ペニーでの郵便配達が制度化していたから(『18 世紀ロンドンの日常生活』 170)、ここには、エンジェルの語源でもあり、『受胎告知』などの絵画でも知られる、メッ セージ伝達者の意味がかけられている。ただ当時は、"Postboy"とは普通には大人の配達夫 (Postilion) のことを指していたのであり、それが幼児の顔になっているのは、boyという 言葉に、大人と子供の対照が掛け合わされていることはある。天使の出現に大きく口を開け て驚いている説教師は、その拍子に被っていた鬘が落ちそうになっているのだが、その頭は 剃り上げたトンシャー(tonsure)と呼ばれたカトリックの特徴的な坊主頭になっている。 これは、当時の国教徒から見ると、メソジストは「隠れカトリック」(*GW*176) と思われて いたということからきている。魔女信仰が廃れれば聖書信仰もなくなると言って、幽霊や魔 女の実在と霊的な現象を不可分なものとして結びつけるウェズレーの考え方にも明らかな ように(Jarrett 184)、メソジストには、奇跡信仰や魔術的な傾向性の強いカトリックとは 似たところがあると考えられていたのだ。

長い植民地抗争や、1745年のヤング・プリテンダー蜂起に呼応したジャコバイトの反乱 などによって、イギリスにおける対仏・対カトリック嫌悪感は、この時期、ほぼ最高潮を迎 えており、これがこの風刺画にも影を投げかけている。メソジストは、もともとは、その命 名の由来である厳格で禁欲的な信仰生活を意味したメソッド (規律正しさ) から来た蔑称で あったのだが、これがカトリックの修道僧の生活に似ていたりしたこともあって、両者を重 ね合わせる見方が、当時民衆の間で根強かったのだ。メソジストとしての派は形成していた ものの、ウェズレーやホイットフィールドは国教会に属したまま運動を続けていたのだし、 その教区を無視した巡回説教は、新しく多くの人々をその「再生」(regeneration)の信仰で 惹きつけてはいたものの、個々の国教会教区の管轄を犯していたから、その説教に国教会の 教会を使用できないことが多く、メソジストの説教は野外でのものが多かった。文人ホレ ス・ウォルポール (Horace Walpole) は"The Methodists are secret Papist."と言っているし、 反発する国教徒などは、その説教時に、"Popery, popery"というヤジを入れただけでなく、 暴力的な弾圧や妨害も頻繁に起こしていたのだった。 ジャコバイト反乱の 1 年前の 1744 年 に、カトリック教徒のロンドンからの退去令が出されたとき、ウェズレーは周りから危険な ロンドンからの脱出を勧められるが、ウェズレーは、カトリックと混同視されるのを恐れて、 あえてそれをしなかったといわれるほどだったのである。(Lecky 632-33)

また、*CSF* 中で、説教者が驚いているのは、天使の出現が、突然だったこともあるだろう。天使や霊的な存在が霧や雲の中から出てくるというのは、一種の聖書画題のコンヴェンションになっていたし(West 8)、それも突然の出現とされていたのだった。例えば、デフ

ォーの『幽霊論』(An Essay on the History and Reality of Apparitions 1727)の挿絵から採った図 2 (114) は、裁判の最中に突然,雲とともに自分が殺した人物の顔が霊として出現してきたのを見た犯罪者が、それまでの否認を一転して自白したという場面なのだが、ここから見ても、突然の雲や霧に包まれての霊の出現が、それを見たものの驚きを図像的に表現していると考えられようし、この場合の説教者の驚愕を示す目と口がそれによく呼応している。胸のあたりではだけた聖職衣の間から、道化師の着衣のまだらの市松模様が見えるのは、その説教壇の前に開かれた聖書中の"I speak as a Fool" (Corinthian ii . 23)という聖句に対応している。

よくわからないのが、メッセンジャー・ボーイとしての天使が咥えている、"To St Money Trap"というメッセージの意味である。ポールソンをはじめ誰もあまり具体的に言及してい ない。ホガースの絵では上下に位置するものが意味的に対比されていることが多いことか ら、画面下の"The Poor Box"と書かれている貧民救済用の寄付金箱が、針金でできている "Mouse Trap"のようだから、これが Trap という点で重なっているという解釈があるもの の、どうもはっきりしない。ここには、私見によれば、メソジストの組織的な寄付金納入の 方法が示唆されていると思われる。メソジストたちは、宗教活動の基本的な単位として 10 人前後の小グループ制を導入しながらそれを class と呼んでいたのだが、かれらは活動の基 金として、十分の一税以外に、活動費として年 1 シリングを四季払いの形で寄進させる方 法をとったという。そしてとりまとめられた寄付金は、貧者救済、新教会の建設、讃美歌集 の印刷、巡回説教者たちへの旅費の援助など様々に使われたという。基金はクラスのリーダ ーがとりまとめ、クラスの信者の中で、貧しくて寄進ができない場合は、リーダーが肩代わ りして払ったというから(Armstrong 66)、ある意味ではかなり強制的な「罠」のような 感じをもたせる集金方法だったわけであり、これが、"The Poor Box"が"Mouse-trap"と "Money-Trap"へと重ね合わされて揶揄されているのではなかろうか。「聖マネー・トラップ へ」というメッセージは当然、カトリックの聖人崇拝を意味しており、宛名も嫌味になって いるのだ。

絵の中央には演台がしつらえられており、その背後には本を手に取って見ている男性が一人と、その両脇に天使が二人並んで見えている。この二人には頭上のそれのようには雲がかかっていない。この場面は、先に出された ED と後にこれを修正した CSF とでは、細部が微妙に違っていて興味をひかれるのであるが、何よりもこの絵画的焦点の中央に描かれているのが、このメソジスト派集会場の主たるジョージ・ホイットフィールドだといわれている点が問題だろう。3人の表情や演台の垂れ幕などの相違点に注目しながら読んでいってみよう。(図3、図4)

まず、*ED*(図3)では、向かって左端の天使には羽根がないのであるが、右端のそれは、 顔の表情が天使らしい可愛らしいものではなく、羽根の下には胴体がなく、アヒルのような ひれ掻きのついた足が二本、直接見えている。ここからホガースの描く奇妙な天使たちは、 プットーの顔とアヒルの羽根との合成だと推測されよう。そして、中央の男はかなり頬のだ ぶついた肥えた男のように描かれているのだが、*CSF*(図 4)になると、この男は、聖職者のカラーはそのままだが、顔が縦長で眉毛が下がった寄り目のように変化されている。この聖書の読み係(リーダー)の男はホイットフィールドにあてつけられているのであり、より実際の顔に似せることで、本人への揶揄を強めているわけだ。ホイットフィールドは、幼少時のはしかが原因ですがめ目(squint)になったことはよく知られており、サミュエル・フット(Samuel Foote)作の『未成年』(*Minor* 1760)という笑劇中で、「すが目先生」(Dr.Squintum)としてすでに揶揄されているほどだったというので、(*Oxford DNB*)、当時はメソジスト派の有力な聖職者として突出していたホイットフィールドは、さまざまなジャンルでこの特徴を風刺されていたのだった。ホガースが *CSF* で、この男の下がった眉とより目の様子を新しく描きこんだのも、それなりの理由があったのである。

EDでは、演台の縁に"CHERUBIN AND SERAPH(im) DO CRY"(天使ケルビムも天使セラピムも泣く) と見え、実際、ホイットフィールドは説教をすると感極まって泣かずにはいられなかったという(Paulson GW173)。CSFでは、これは、"Continually do Cry"と書き換えられているが、これは多分、天使であることは自明で、むしろ讃美歌や鳴き声が長く続くことへの当てこすりへと変えたのだろう。その脇のたれ布には、"Only Love to us be given, Lord we ask no other Heaven"とあり、その下には出典として"Hymn by G. Whitefield Page 130"の文字が読み取れる。これによって、演台の男がホイットフィールドであり、その両脇の姿が天使たちであり、彼らは今讃美歌を歌っていることがさらにはっきりわかるのである。ED のホイットフィールドには羽根がなく CSF ではホイットフィールドの背中に羽根が生えているように見えるのは、彼が天使同様の声のいい聖書の読み手であるとともに、讃美歌の歌い手でもあることを示しているのだろう。左側の天使には羽根が見えないのは、あるいは、この羽根がホイットフィールドの背に貸与されていることを示しているのかもしれない。

ホイットフィールドはまた、良く通る素晴らしい声をしていて、これは友人だったベンジャミン・フランクリンが証言している。フィラデルフィアでホイットフィールドの素晴らしい演説を聞いて、当初は断固として払うつもりのなかった寄付を、説教が終わったときには、有り金すべてを出していたというフランクリンは、ある時、好奇心から、町の裁判所の上段から演説するホイットフィールドの演説をどれぐらいの聴衆が聞いているか勘定したという。離れていきながら、通りを埋め尽くすその数を計ってみると 3 万人もの数になったというので、彼の演説の声の大きさは尋常のものではなく、「彼が野外で 2 万 5 千人からの人に説教したという新聞記事も・・・決して嘘ではないことを悟った」と言うのである。そしてさらに、「言葉の調子、強勢のおき方、音の抑揚などすべて申し分なく整っていて・・・優れた音楽から受ける快感によく似たものを覚えないではいられない」(『フランクリン自伝』174)とつけ加えている。メソジストは、国教会に比べると、讃美歌の多用がその説教時の大きな特徴となっており、ウェズリーの弟のチャールズは、6000 曲もの讃美歌を作ったといわれる、英国最大の讃美歌作家として有名だが(Oxford DNB)、ホイットフィール

ドの讃美歌も、これに劣らずよく知られていたのだった。教会での説教の許可を得られなかった彼らは、図5で見られるように、野外で説教をすることが多かったという。樽の上に乗っての説教の図は、スウィフトの『樽物語』( $A\ Tale\ of\ a\ Tub\ 1704$ )中のピューリタン風刺以来の伝統のあるものだが(図7)このような樽は一種の拡声器の役割をもはたしていた。そしてホイットフィールドの図(図5)をみると、当時の野外説教のあり方がよくわかろうというものだ。左上の樹上でトランペットを吹く少年が、宗教画の天使になぞらえられていると解釈すれば、樽の上に立って説教をするホイットフィールドとそれを恍惚として聞きほれる聴衆の構図は、ホガースの二つの絵にも移し替えられるだろう。天使はまた歌と楽器が得意であったのである。

大陸の古典的な宗教画には、例えばベルニーニの『聖テレジアの法悦』やモラッツォーネの『聖フランチェスコの法悦』のように、聖女・聖人を天使が至福の歓びに誘うという主題のものが多い。無論そこには「歌や楽曲に長じた天使たち」(岡田温司『天使とは何か』85)によっての、天上の祝福と歓びへのいざないがあるのだろうが、EDや CSFにおいても、天使の役割は同様のものであろう。集会場に集まった信者たちは、説教と讃美歌により、みな感極まって一種の陶然とした法悦の表情を表わしている。EDでは、キリストの姿をかたどったパンにより聖体拝領を行っており、数人がこれを恍惚と苦悶のうちに口にしている。これが、聖なるキリスト教儀式への冒涜的な表現ととられそうであったためか、CSFでは、このキリストのイメージは、当時世間を騒がせていたコック・レインの幽霊の、ろうそくと木槌をもった女幽霊・ファニーの像に変えられているのである。逆にいえば、このような世俗の事件への言及を表面化することで、キリスト教一般への冒涜だという非難から逃れようとしたのだろう。いずれにせよ、ここには、EDという表題に表わされている「熱狂」(Enthusiasm)の主題が暗示されているのであり、天使のもたらすエクスタシーがその裏では一種の集団ヒステリー現象としての含みを与えられていることになる。

「熱狂」の概念は、17・18世紀にあっては、大いに問題とされたテーマであった。「エンスュージアズム」は、語源から言えば、神的な霊が個人に憑いた精神状態をいうのだから、そう思い込んだ人たちは、理性的な人々からすると、非合理的な狂信状態にあるとみなされ、頑迷な迷信から離れられないものとして、この絵に見られるように、攻撃の対象になったのであった(Burnham 35)。国教徒の多くがピューリタンとカトリックを左右に置いた中道の位置にあったとすれは、そのような人々は、1世紀ほど前の内乱状態を誘発した左派ピューリタンの、このような神のインスピレーションを中心に据えた考え方は、世の秩序を崩壊させた自己欺瞞と狂信という危険な概念として捉えられたのもうなずけよう。先ほど樽との類比で言及したスウィフトの『樽物語』(ちなみにいえば、この Tale of a Tub の Tub は、夏目漱石の『文学評論』以来『桶物語』とされているが、「桶」より「樽」の方が正しくはあるまいか)は、ピューリタンの「熱狂」をグロテスクなまでに描いた典型的な作品でもあったので、ホガースはこのようなスウィフトの「国教会的な合理主義」(Philip Harth, Swift and Anglican Rationalism )の伝統を受け継ぎながら、それをメソディズムとカトリック(カ

トリックも非国教徒であった)に重ね合わせたのだろう。このホガースの作品の少し前に出されたヒューム(David Hume)の『道徳・政治・文学論集』(Essays, Moral, Political, and Literary1758)には、「迷信と熱狂について」というエッセイが収録されていて、その中で、ヒュームはイギリスの合理的啓蒙主義の立場から、神的な存在からの直接の霊感を受けた人は、自己を特別な神の寵児とみなすようになり、熱狂的な狂人になってしまう。それゆえ「熱狂は人間社会に最も残酷な無秩序を生み出す」(ヒューム 67)と述べており、「反熱狂」の合理主義の精神を受け継いでいるのである。ポールソンも、ホガースの ED から CSF へのタイトル変更の理由としてこのヒュームのエッセイの影響を指摘している(GW 177)。「天使の歌声」に酔いしれる、ここに描かれた聴衆は、カトリックの聖画にみられるような聖人たちの「法悦」への風刺として連想されていたのだろう。

最後に問題としたいのは、CSF出版のほぼ 10 年前に出されたホガースの絵画理論書である『美の分析』に付録として添えられた図版である。よく知られた蛇状曲線と溌剌とした動きと自然の多様性を説いたこの書には、楽しくカントリー・ダンスを踊る様々な姿態の人間を描いた Plate II とともに、それと対照的な冷たい石像彫刻を並べた庭のような場所(Statuary Yard)を描いた Plate I(図 6)が、「生きた人と死んだ彫刻」(Paulson Hogarth III 103)、動と静の対比をするように 2 枚添付されているのだ。天使は、その右端の死者のモニュメントの台座に小さく登場する(図 6 の部分拡大図 11)。この天使に関してはあまり議論されていないようだ。

この場面にはモデルがあって、それはホガースの友人のヘンリー・チア― (Henry Cheer) のハイド・パーク・コーナーにあった彫刻工房の彫刻製品の置き場所であったという (Paulson Hogarth III 101)。当時のイタリア趣味の貴族たちの庭園には、古典的なローマ 彫刻のコピーを並べて置くこともあり、それは例えば、ホガースの仇敵であったウィリア ム・ケント(William Kent)の設計になるチジック・ハウスのエクセドラと呼ばれる半円形 の庭園に置かれた立像群にも見えるものである(図 8)。このような、ことにグランド・ツ アーから戻ってイタリア趣味に魅せられた貴族たちは、競って高額の絵画や彫刻を自宅に 収集・展示するようになり、その需要にこたえるべく彫刻などのコピーが数多く作られたの であり、その設計とデザインなどを担当する、ケントのようなイタリア帰りの美術品の目利 き(Connoisseur)が、重用されるようになっていたのであった。中には偽物の美術品を本 物と偽って売りつけるインチキ商人のような目利きもいたという。チアーの彫刻置き場は、 このような売り物のコピーの置き場であったのであり、そこにはこの絵に見られるように、 ヘルメス (Farnese Hercules)、アンティノウス (Antinous) ヴィーナス (Venus de Medici)、 アポロ(Apollo Belvedere)、ラオコーン(Laocoon)などの古典作品の模造品が商品として 置かれているわけなのだ。右端には、それら美術品の鑑定者としてのコノワッサーが、裁判 官然として、鬘と衣装をつけて君臨し、それらの美術品に鑑定という名の判決を宣告してい るのである。ジャッジ (Judge) はここでは、裁判官と美術品鑑定者の双方を意味している。 彼は公平で正確な判決文が書かなければならないのだが、無知と偏見に満ちた宣告を下す 場合もあり、義父であるセント・マーチンズ・レインの絵画学校を引き継ぎ、イギリスの美術の評価を高めようと、このような外国趣味と戦っていたホガースにとっては、ケントとの争いに見られるように、市場を席巻するイタリア趣味と激しく戦わざるをえない立場にいた。その戦いを戯画的に描いたのが、スウィフトの『書物戦争』( $Battle\ of\ Books\ 1704$ )から構想されたホガースの『絵画戦争』( $Battle\ of\ Pictures\ 1744$ )で、そこではホガースの作品と大陸の古典絵画はぶつかりあい引き裂きあっているのである。 $AB\ Eaa$ にだジョゼフ・バーク( $Joseph\ Burke$ )の言葉によれば、ホガースはこのような目利きと呼ばれる「鑑定者・裁判官と交戦状態にあった(warfare against the connoisseurs xvi)」といわれている。当然ながら、この絵には、犯罪の裁判者と美の判定者というジャッジの両面への批判的な視線が張り巡らされているのである。

右端の台座の上の人物は、その鬘と法衣から裁判官と判断されるわけだが、その大きさが 不釣り合いなほどになると、過剰さがかえって読者を笑わせてしまうという説明が ABのテ キストにはあり、この描写が美術品の目利きへのあてこすりであることがわかる。その左手 にはプットーが直角定規のようなものを持ちながら、法衣の端で涙を拭いているのは、定規 の形はホガースの最後の作品 Tailpiece (図 9) に見えるように、処刑台に通じるわけだか ら、目利きである裁判官の過酷な死刑判決に抗議するかのようだ。ただこの 16 と番号をふ られたジャッジの彫刻と二人の天使、そしてその背後にある文字の彫られた石板などは、一 つの一体化した作品と見ることができるのであり、これは庭に展示されている古典的な彫 刻群とは違い、著名な人物の死後、その棺とともに聖堂に祀られるモニュメントを表わして いるのだ。宗教改革により、プロテスタントでは死者のための祈りの有効性が否定され、私 的な祭壇は否定されていくのだが、18・19 世紀になるとこれが復活してくるという。(指昭 博『キリスト教と死』 210) 聖堂内の偉人たちのモニュメントは、キリストの磔刑像や聖母 子像などを、偶像崇拝として排するプロテスタントではあったのだが、批判はあったものの、 聖人ではない普通の人間のモニュメントとして存続し、その背後に死者の遺体の棺を置き ながら、聖堂内の観光客たちの参拝の対象になっていたのである。いかにもプロテスタント とカトリックの中間に位置するイギリス国教会らしいともいえる。ホガースは『当世風結婚』 の第 2 図でもそうだったように、製作年度を画中に残すことがあったから、この背後の石 板に刻まれた「(O)BIT. DECEM.…1752 AETATIS」(1752 年 12 月没?歳)の 1752 年 12 月は作品の完成年月を表わすものである。ただ、モニュメントとしては当然、描かれた ジャッジの死亡時をもあらわすことにもなるので、これは、ジャッジの死、つまり審美眼の ない鑑定者の死にも繋がるわけだ。この像がモニュメントであること自体が、ポールソンが 言うように、これはホガースの「悪しき鑑定者・裁判官の終焉」への期待(HogarthIII 109) を意味したのでもあった。ただ、ここで注目したいのは、ジャッジがその左足で押さえつけ ている、例の幼児の頭と羽根からなる天使なのである。(図 10)

パノフスキーによれば、1200 年ごろのローマの高僧の「モニュメンタルなゴチック様式の壁面墓」には「天使たちによって高みへと運ばれる小さな人間の姿をした魂の昇天が」彫

られていたというし、また、ミケランジェロの設計になるモニュメント『ユリウス 2 世墓廟』(1513)では、法王を乗せた棺を担ぐ二人の天使が配置されている(『イコノロジー研究』下 94、106)ということもあるから、亡くなった人物の魂が昇天するのを助ける天使のイメージは、大陸の宗教画においてはポピュラーなものだったといえよう。ミケランジェロが新プラトン主義に影響を受けていたように、デューラーもまた、瞑想による魂の上昇と芸術家の想像力の飛翔を『メランコリア 1』(1514)において、小翼をもつプットーとともにそれを定着しているのはよく知られている。翼は飛翔をあらわすのだ。ところがこのジャッジの図におけるホガースの天使は、その羽根で精いっぱい羽ばたいて死者の魂を天国に運ぼうとしているようなのだが、とてもその勤めを果たすことができないようだ。必死の形相が醜く歪んでいるのも、その努力が無駄になっているかのようで、かえって見る者の笑いをさそってしまうのだから、これは明らか天使のパロディとして意図されている。ジャッジはとても天国には行けそうもない。さらにいえば、天使の下にある台座に描かれた建物の風景は、その重量の圧力に上から押し付けられ、横に膨らみ歪んでいるように見える。ジャッジの犯した罪の重さを支えきれず、天使もその浮揚力が尽きているといいたいのだろうか。ホガースは細部にこだわるのである。

幼児と羽根の合成図(図10)は、より図案化された形で、22の番号とともに、このジャ ッジのモニュメントの脇に、小さな枠としての部分図に登場する。そして、この天使図が説 明用の例として言及されている ABの本分テキストでは、二つのイメージが合成された場合 の「最大限に異様な」("the most extraordinary"38) 例として説明されており、それは、"An infant's head of about two years old, with a pair of duck-wings under its chin, supposed always to be fling about, and singing psalms"(AB38)とされているのだ。この、「2 歳ほどの幼児 の頭のあごの下に 2 枚のアヒルの羽根をつけたもので、讃美歌を歌いながら宙を飛び回っ ているもの | という言語表現で初めて、われわれが EDや CSFで推定していたはずのもの がアヒルであるとはっきり措定されるのである。アヒルはガアガアと耳障りな声で鳴く、し かも飛べない家禽であるところがみそであり、天使の歌声と天使の飛翔への好対照である ことはいうまでもない。この引用の少し前のところで、ホガースは、「過度に不適当で不釣 り合いなものが合成されるとそこには大笑いが生まれる」("When improper, or incompatible excesses meet, they excite laughter "AB 37) と言っているから、この図から 風刺の笑いを狙っていたことは明らかだろう。このプットーの顔とアヒルの羽根の合成図 が書かれたのは、*EDや CSF*が描かれたほぼ 10 年前のことなのであり、ホガースにとって は長年風刺のイメージとして念頭にあったものだと推測できよう。ポールソンは、この原型 を、さらに 30 年ほども遡って、ウィリアム・ケント批判の一環として描いた「ケントの祭 壇へのバーレスク」(Burlesque on Kent's Altarpiece 1724) に求めているほどだから (AB38 注)、彼にとっては特に思い入れのあったイメージなのであった。ジャッジの左足の下で小 さく描かれているこの天使図にも大きな意図が込められていたはずである。

冒頭の、ED と CSF に関するホガースの創作意図に戻ってみると、われわれが見てきた

彼の奇妙な天使の合成図は、大陸の絵画の「偶像崇拝的な傾向」への風刺だったわけだが、それは、伝統的な天使のもつ、神からのメッセージの伝達、人を恍惚と法悦にいざなう歌声、そして死者の魂を天井に運ぶ翼などのイメージを、偶像破壊的な意味合いを込めて作りだされたのであった。ホガースの天使たちは、「伝える」、「歌う」、「飛ぶ」というその3つの基本的な働きへのパロディになっているのである。

## 引用・参考文献

- フレデリック・アンタル『ホガースーヨーロッパ美術に占める位置』中森義宗・蛭川久康訳 英潮社 1975.
- 岡田温司『天使とは何か』中公新書 2016.
- 指 昭博『キリスト教と死―最後の審判から無名戦士の墓まで』中公新書 2019.
- リチャード・B・シュウォーツ『十八世紀ロンドンの日常生活』玉井東助・江藤秀一訳 研究社出版 1990.
- 仙葉 豊「幽霊実話―「ヴィール嬢の幽霊」」『さまざまなるデフォー』関東学院大学出版会 2018 53-69.
- \_\_\_\_\_「英国 18 世紀幽霊実話の構造―「ヴィ―ル嬢の幽霊」を中心に」『表象と文化 XVI』 大阪大学大学院言語文化研究科 2019 33-66.
- エルヴィン・パノフスキー『イコノロジー研究―ルネサンス美術における人文主義の諸テーマ』(上・下) 浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏訳 ちくま学芸文庫 2002 (1987)
- デイヴィッド・ヒューム『ヒューム・道徳・政治・文学論集』田中敏弘訳 名古屋大学出版会 2011.
- ベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』松本真一・西川正身訳 岩波文庫 1957.
- Armstrong, Anthony. *The Church of England, the Methodists and Society 1700-1850.* University of London Press,1793.
- Burnham, Frederic. "The More-Vaughn Controversy: The Revolt against Philosophical Enthusiasm." *JHI* 35(1974): 33-49.
- Defoe, Daniel. An Essay on the History and Reality of Apparitions (1727). Ed. G.A. Starr. Satire, Fantasy and Writings on the Supernatural By Daniel Defoe. Vol.8. Pickering and Chatto, 2005.
- Dwyer, Fred. Georgian People. BT Batsford, 1978.
- Hallett, Mark and Christine Riding. *Hogarth*. Tate Publishing, 2007.
- Harris, John. *The Palladian Revival; Lord Burlington, His Villa and Garden at Chiswick.*Catalogue Published in Association with Yale U. P., 1994.
- Harth, Philip. Swift and Anglican Rationalism; The Religious Background of A Tale of a Tub.

The U. of Chicago Press, 1969.

Hogarth, William. *The Analysis of Beauty*. Ed. Ronald Paulson. Yale U. P., 1997. (ウィリアム・ホガース『美の解析 – 変遷する「趣味」の理念を定義する試論』宮崎直子訳 中央公論美術出版 2007)

\_\_\_\_\_*The Analysis of Beauty.* Ed. and Intro. Joseph Burke. Oxford at the Clarendon Press, 1955.

Hogarth's Graphic Works. Third Revised Edition. Compiled with a Commentary by Ronald Paulson. The Print Room, 1989.

Jarrett, Dereck. England in the Age of Hogarth. Paladin, 1976.

Ireland, John and John Nichols. Hogarth's Works. II. Oliphant, Anderson, and Ferrier, 1883.

Lecky, William E. H. *A History of England in the Eighteenth Century*. Vol. 2. D. Appleton and Company, 1888.

Paulson, Ronald. Hogarth Volume III: Art and Politics, 1750-1764. Rutgers U. P. 1993.

\_\_\_\_\_*The Beautiful, Novel, and Strange: Aesthetics and Heterodoxy.* The John's Hopkins U. P., 1996.

Swift, Jonathan. *A Tale of a Tub.* Eds. A.C. Guthkelch and D Nichol Smith. Oxford at the Clarendon Press,1958. (ジョナサン・スウィフト『桶物語・書物戦争・他一篇』 岩波文庫 1968)

Uglow, Jenny. Hogarth; A Life and a World. Faber and Faber Limited, 1997.

ホガースの図版は、すべて、Hogarth's Graphic Works より。



図1 Hogarth, Credulity, Superstition, and Fanaticism.

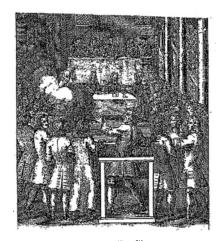


図2 Defoe, Reality of Apparitions. (挿絵)

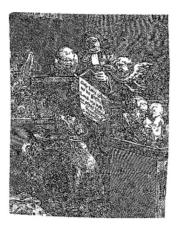


図3 Hogarth, Enthusiasm Delineated. (部分)

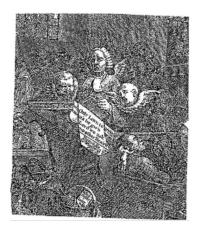


図4 Hogarth, CSF. (部分)

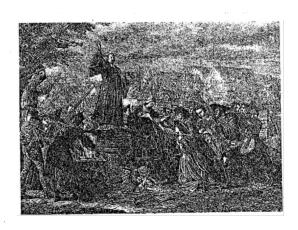


図 5 Whitefield Preaching in Moorfields. Dwyer より

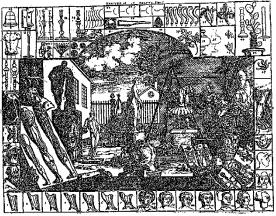


図 6 Hogarth, Analysis of Beauty, Plate I.



図7 Swift, Tale of a Tub. (挿絵) Guthkelch and Smith 編より

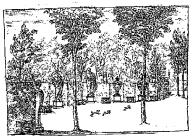


図8 Kent, A design for the Exedra. Harris より



図9 絞首台



図 10 天使(ABの 図案化部分拡大図)



図11 図6の右端部分拡大図